死傷が多い。然し敵の前方を迂回した敵の一部は損害なく我に近迫し第十一中隊の一部と森林中で不期遭遇戦を発生。我が部隊は突破されて午前九時頃敵は喊声を上げて我が陣地へ突入して来た。我が陣地の各将兵は白兵を揮って大いに奮戦した為敵は二、三〇〇米後退し午後三回手榴弾投擲距離迫の突撃を行ったが何れも不成功に終った。然し三回目の突撃後は迫撃砲弾の射撃が熾んで之が為我が将兵は陣地について儘逐次死傷が累加する様になった。これ迄に第十一中隊は二五名の戰死を出した。

薄暮に近い頃迫撃砲の射撃を中止すると敵は日本語で「焼き殺すぞ」と叫んだかと思うと焼夷弾が何かを射撃したと思うと能く猛烈な勢いで焼夷弾を射撃した。第一線は遂に陣地の位置を変更するの止むなきに

外務省

狀態となった。かくして敵は逐次に迂回して夜に入ると一部は高台と陣地との中間附近まで迫撃した。此の頃敵は小銃線の橋梁を破壊した。我が増援阻止の積りであろう。

3. 停戰命令

此の日夕刻師団から「停戰せよ」の命令を受ける。

五 武裝解除

1. 停戰交渉

停戰交渉

聯隊長は二十三日朝露語をよくする村山主計中尉を軍使として自動車で能崎方面へ出たが同軍使は車上で射殺された。そこで更に聯隊副官石黒大尉を出したが「聯隊長自から到れ」とのことで聯隊長自身交渉に当った。

2. 武裝解除

能笹峠附近にあつた菅原大隊は午前中武装解除の命令を受けたが、後方に敵が入つて居る為、逢坂への集結は困難な為一挙北東へ退んで、川上炭坑へ向つた。

尓余の部隊は、將校伝令で、命令を徹底させ、其の中の中にそれぐ、其の地点で、武装を解いた。但し次のやうな例外もあつた。

先に蘭泊道へ派遣した第十(中隊の一小隊は武装解除を嫌つて留多加へ走り、又荒貝沖附近にあつた第一大隊は停戦命令の徹底を欠いて二十四日以降も複雑な指揮が敵の行李縦隊などが蝟集して前進するのを見て、聯隊本部へ連絡した所、主力は既に武装解除を知り、豊原へ向つた。又本斗の第十二中隊は留多加方面へ後退の途中、二月二十四日中隊長の独断で解散を命じ、中隊長だけ留多加へ連絡に来た。

留多加の残留隊長は、同中隊長に対して速かに部下を纏めて引き返す様に命じたとうり、再び集め得たものは約半数であつた。

かくて二月末頃、全隊豊原に集結した。

六

本戦中による損傷

荒貝澤附近　戦死三。(中將校二)　負傷二四

能笹峠〃　〃四。(〃一六)　〃三四(中將校二)

玄台方面　〃三五　〃二九(〃三)

計　戦死一。五　〃八七

(註)　右の外歩二五、そして上敷香に於て戦死四を出した。

第六款　対蘇作戦実施間に於ける主要部隊の動静

（附図　第一参照）

一　歩兵第三〇六聯隊の行動

1、恵須取附近の戦斗の勃発に伴つて此の方面の蘇軍の南下を阻止する為ウ農附近にあつた歩三・六の第二大隊（長沼田大尉）を最狭部の要所久春内附近に派遣したが八月二十日眞岡附近へ蘇軍一部の上陸を見たので其の夜直ちに之を落合附近に戻した。

右に伴つて聯隊長高澤大佐も司令所を落合へ出た。

2、古屯及び恵須取方面の戦況の推移に伴い西方面に最も関係深き要処内路附近を抑へる為富内附近にあつた第三大隊主力（長塩澤大尉）を同地に派遣した。

同大隊は八月二十日古屯方面から南下した一部の蘇軍斥候と約半日戦い戦死六名を出した。

3、武装解除は走々右の位置（第一大隊は大泊附近聯隊本部豊原）で実施した。

二　山砲兵第八聯隊の行動

1、第一中隊が古屯・恵須取・内路附近・第二中隊の一分隊が眞岡附近で戦斗し、且第二中隊の一分隊を本斗附近へ派遣した外は聯隊主力は豊原附近にあつて武装解除となつた。

2、戦斗間の損害

古屯附近　第一中隊　戦死四　負傷六

眞岡附近　第二中隊の一分隊　戦死五・六名

三　工兵第八聯隊の行動

1、第一中隊主力　対屯・古屯方面　第四中隊の一小隊は眞岡方面で戦斗

2、右の外聯隊長は第一中隊の一部・第二中隊及び上敷香の初年兵教育隊の一部（約三〇名）を以て次の如き

外務省

作戦行動を実施した。又第三中隊は最後まで豊原に位置した。

(一)八月十四、十五日に蘇軍車輌部隊の南下阻止の為上敷香以北の各橋梁破壊実施。

(二)次いで、気屯、初内及び上敷香飛行場の破壊実施。

破壊状況次の通り。

気屯基地↓滑走路 五〇ヶ所 爆破孔構成(直径四米、深サ二米)一六〇屯 爆弾使用

初内基地↓滑走路及び誘導路に対し全石処置

上敷香基地↓右に準ずるもの一五〇箇所

尚内路及び塔路飛行場は破壊準備をしたが実施に至らなかつた。

3. 八月十八日第四中隊(一小隊欠)を内路附近に前進させ内路以南の交通遮断を企図したが参謀長から中止を命ぜられ知取から豊原へ帰つた。

又真岡方面の戦ずに方そして真線上のトンネルに古桟橋を充塡して鉄道遮断を実施せんとしたが遮断念した。

4. 戦闘の損害

戦死 第一中隊(古屯方面) 一五名

第四〃(真岡〃) 一三名

負傷 約一〇名

行方不明 一五名

輜重兵 第八聯隊

第二大隊(第五、第~~六~~中隊欠)は古屯方面特に古屯部落に於て激戦したことは前述の通り。

其の他は各方面に分散的に使用されたものも相当あるが細部は明かでない。

第八十八師団衛生隊の行動

三分の一は古屯方面一部は真岡方面に於て戦闘

外務省

主力は戰斗開始前から豊原に移駐して居た。入療の患者は豊原移駐に方て、全部陸軍病院へ引きつゝいた。
戰斗間に於ける損傷等は明かでない。

六、上敷香陸軍病院の行動

開戰時に於ける入院患者約五〇〇名、其の中重症の患者約二〇〇名は八月十日退院帰隊させた。

2、病院は九月一日豊原移駐の予定であつたが開戰の爲変更し、八月十二日竹内軍医大尉指揮の下に患者約二〇〇名と、又翌十三日重症患者十三名と豊原第四国民学校へ移駐した。

尚開戰前は上敷香に分院を設けるつもりであつたが之を中止して八月十七日残りの全職員及び患者を豊原へ向て出発せしめ翌十八日豊原へ着いた。

八月一日豊原着後直ちに定員外者、兵の一割を除隊、召集解除し、且つ女子職員を全員帰郷させた。

外務省

之等のものは翌十九日の船で全員北海道に向け出発した。

又八月二十日樺太に留守宅を有するもの全員を除隊召集解除した。

3、八月二十二日豊原爆撃によつて軍官民を通じ約二五〇名の死傷者を出したが一般の衛生機関が全部停止したので之を一手に引き受けた。

此の日山口軍医中尉戰死し澁江軍醫中尉は重傷した。

又此の日に於ける軍関係の入院患者は真岡附近の戰斗及び豊原爆撃によるもの約三〇名並びに古死方面国境附近の戰斗によるもの約三〇名計約六〇名であつた。

七、樺太義兵隊

浅瀬氷遣所は八月八日上敷香へ安別氷遣所は八月九日西柵丹分遣隊へ向て引き揚げた。

2. 古屯及び気屯のものは戦中一つ後退し、八月十七日大谷に着き、其の夜一旦達坂へ転進せしめられたが後再び豊原へ帰る。

3. 上敷香分隊は、八月十六日上敷香発、同十九日大谷に後退、

4. 大泊分隊は其の儘

5. 恵須取分隊、西栅丹分遣隊、真岡分遣隊の状況は明かでない。

外務省

第七款　第八十八師団の実施した停戦交渉

停戦に関する方面軍の命令に接する迄、師団長は上敷香附近に筑紫参謀と共に派遣してあつた高島少尉を古屯北方半田附近の蘇軍最高指揮官の許へ出したが成果を得ず更に、十九日午後、筑紫参謀は西川附近に於て蘇軍の先遣部隊長に会して二十日午前六時迄に正式軍使を上敷香に派遣する」ことを約した。　そこで鈴木参謀長は十九日直ちに豊原出発、途中内路で歩兵三〇六の塩沢大隊を掌握して、から二十日上敷香で合流したが、結局不成功に終つた。

次いで、持務機関長蟹江少佐を正式軍使として二十一日夜豊原を出発させた。　蟹江少佐は二十二日知取に到着して交渉を開始し、師団長も亦より約四時間遅れて豊原を出発したが、師団長の知取着前に交渉は成立した。そこで師団長は途中から豊原へ帰ることになつた。

師団長の豊原帰還の列車には、師団長に対する掩護と称して蘇軍の一分隊が同乗して八月二十二日午前二時、豊原駅へ到着した。

師団長は、左の様な交渉が成立したので、真岡方面の部隊に対して二十二日「停戦行動を停止すべし」厳命を下したが、部隊からは「戦中行動停止の命は、下せるも効を見ず」と云ふ憂慮すべき電報に接した。

そこで翌二十三日午前五時、参謀要員の吉松大尉を蘇軍中尉と同道、真岡方面へ出発させることにした。吉松大尉一行の出発は、種々の都合で遅れて午前十時頃となり、途坂駅へ到着したのは、午後一時頃であつた。然し此の時は、停戦の命令は既に徹底して各隊共順調に武装解除の実施中であつたので、間もなく帰路につき、二十三日午後八時頃、豊原へ到着した。

かくて武装解除も順調に進捗し、八月二十日在樺全部隊終了、二十日師団司令部の機能は完全に停止するに至つた。

外務省

第二節　北千島の戰況（附國第五、第六參照）

一　戰斗の開始

八月十七日第九一師團に於ては、終戰に関する指示の為各部隊長を柄原師團司令部に集めたが、其の後半夜午前二時頃まで次のような狀況の急変を知った。

即ち「十七日午後十一時半頃から、ロパトカ岬附近の蘇軍射程砲は、占守島北端地区に対して射撃を開始し、次いで十八日午前一時半頃から、約二大隊の部隊が、竹田浜中心の地区に上陸中である。我が独歩第二八二大隊は此の敵と自衛戰斗を開始した。備

そこで師團は、自衛上全部隊に戰斗戰闘を命ずると共に、取り敢えず独歩二八三大隊（長竹下少佐）に戰車一中隊を附して此の敵を攻撃することとしたが間もなく之を変更して「戰車第十一聯隊（長池田末男大佐）の主力をもって四嶺山附近の敵を、次いで千歳台附近の独歩二八三大隊をもって敵の左翼を、柏原第二八二大隊（長橋口少佐）をもって西部隊あった独歩二八八大隊（長橋口少佐）をもって西部隊の中間地区から攻撃」する様命令した。

二　戰車第十一聯隊の戰斗

八月十八日の戰況

戰車第十一聯隊長は十七日夜合同から帰る和部隊將校を集合させてあったが十八日午前二時頃狀況の急変と知ると共に「四嶺山附近奪取」の命令を受けた。

聯隊長は乃ち將校全員に向って「狀況斯の如し。諸君は四十七士たらんと欲するか、それとも白虎隊たらんとするか」と尋ねた。將校全員は即座に「白虎隊」と一斉に答へる。聯隊長は「予の考へも同じだ。今や聯隊長を先頭に下すべき命令もない。只一途に御勅諭を奉唱して敵中に突入せよ。いざ我に續け」として午前四時頃急遽出発、之に従ったもの副官車、各中隊長車等。

外務省

而して第四中隊（これは固有名は独立戦車第二中隊で軽戦車一台は伊藤大尉）は先に尖兵として四嶺山に向はせたが其の他の主力は之に続く事が出来ず午後五時頃出発した。

午後六時半頃、聯隊長車を始め十数輌の戦車が四嶺山麓に到着したが其の時敵は既に四嶺山を占領して居た。そこで聯隊長は主力の到着を待つことなく即時之を駆逐することに決し第四中隊をして男体山北側から、自らは男体、女体両山の中間から敵はその突入した。

猛攻によって駆逐された。伊藤聯隊長以下各中隊長等の大部分も、稜線を越へたところでそれぞれ戦死してしまった。但し第四中隊長伊藤大尉、第五中隊長小沼中尉、第六中隊長小宮大尉は無事であった。（整備中隊長石山大尉は此の戦中に加はらなかった）

爾後、第四中隊長伊藤大尉が聯隊を指揮し午後九時以降聯隊主力を以て次後方三叉路へ後退集結した。敵は再び四嶺山を奪回した。集結した聯隊は第四中隊を以て附近にあった高射砲の井上小隊と共に背形台の方向を主力は男体山の方向を射撃して夕刻に至った。

午後四時頃、帰国から軍使として長嶋大尉が四嶺山へ出発し午後五時半の間に戦車隊は大和橋に集結の命令を受けた。後集結位置を大顴台に変更されたが第四中隊だけ前の命令によって大和橋に集まったが他の主力は命令徹底せず四嶺山麓で夜を徹した。

2. 八月十九日乃至八月二十三日の行動

八月十九日夜戦線整理の為大顴台に後退野戦

陣地構築。同日夜半一夜、更に大和橋を撤退した。

八月二十日朝、敵の一部が干場川別飛及び殿域附近にも上陸したとの風聞が傳り、一時緊張したかこれは

デマであることが分った。

八月二十一日、大觀台にあって終日敵と三、四百米の距離で相対峙して居たが、午後九時頃、戰斗行動中止の命令を受けた。

八月二十二日未明、大和橋に集結、更に三好野飛行場に転移し、翌二十三日同地で武裝を解除された。

3. 本戰中間の損傷

戰車破壞　十六輌（金車輌は約六十輌）

人員戰死　一〇〇名

三、

独立歩兵第二八三大隊の戰斗

八月十八日の戰況

八月十八日の午前五時頃、歩兵第七十三旅団長杉野少將から

次の命令を受けると共に、二十三輌の自動車を配屬された。

「竹田浜附近に上陸した敵は午前四時頃から承迫次四嶽山方向へ前進して居る。

独歩二八三大隊は、部下大隊及び独歩二九三大隊の抽出し得る兵力を持って上陸中の敵の左翼を求めて攻撃せよ」

大隊長は前述の為次の様に部署した。

第一梯団―大隊本部、第一、第四中隊、大隊砲中隊

の一部配屬、山砲中隊（第一砲兵隊第八中隊）配屬

独立連射砲隊第三中隊

第二梯団―第二中隊、独歩二九三大隊の一中隊、

大隊砲、大隊主力

大隊長、竹下少佐は、午前七時、第一梯団と共に天神山に

到着した時、「上陸中の敵の兵力は約二大隊で中一大隊

は四嶽山に向って居るか、他は東海岸を南下して居る」

外務省

との情報に接したので速かに先ず大觀山に向ふことにした。

午前八時過ぎ大觀山に到着して見ると敵の一部が四嶺山に陣るのを確認すると共に東海岸を南下中の敵は木南川の線に達した事を知つた。

大隊長は右から、第四、第一中隊を展開し第四中隊は八五高地（含む）以東の地区、第一中隊は八五高地方面の敵を攻撃、山砲大隊は大觀山北側地区で木南川を進出する敵を射撃、速射砲中隊は右翼後を前進して右中隊の戰闘に協力する様に指示し大隊長は中央後を前進することにした。然し結果的には速射砲中隊は大觀台附近の路上で行動し又山砲は木南川の觀測が困難なので四嶺山上の敵を射撃したいけであつた。又暫時にして第三様国の第三中隊が追及したので中央後の予備となつた。

敵は我が部隊の左翼を防禦する爆撃機六機を協力させる外、盲人に迫撃砲射撃を実施した。第一線中隊は逐次前進し午前九時頃八五及二五高地から射撃を受けた。

右第一線の第四中隊の攻撃は順調に進捗して午頃木南川右岸高地に進出したが左第一線たる第三中隊は午後二時頃漸く一一五高地を占領し得ると云ふ程度であつたので第一中隊の右に連繋して予備隊たる第二中隊（一小隊を）を増加し大隊本部が一一五高地東側地点に位置を移した。

此の日朝来霧が深かつたが午後に入て益々其の程度が大となり各中隊は終始給戰狀態で前進し午後四時頃右第一線中隊は木南川北岸高地に中及左第一線の第二、第一中隊は沓形台東側地区に進出した。然るに濃霧の為第二中隊と第一中隊とは全中で行進交叉を生じて第二中隊が最左翼となり第一中隊と第四中隊

との中間に著しい間隙を生じてしまった。ところが午後五時頃第二梯団たる独歩二九三大隊の一中隊が到着したので之を其の間隙閉鎖に入れて夜に入った。

午後六時頃旅団司令部から午後四時以降戦斗行動を停止せよと命令を受領した。此の当時部隊は全く絶戦状態にあり而も敵はどん〳〵攻撃して来るので却て中止出来ず一晩中射撃の音が絶えなかった。

2. 八月十九日の行動

八月十九日未明、拂暁から第一線に白旗を掲揚すべしとの命令を受けたので其の儘の位置に居る。然るに当面の敵の攻撃特に我が二八三大隊の左翼方面に対する敵の衝力は猛烈で其の一部は一一五高地南側地区を溢れて来た。我は「戦斗行動中止の命令」に基いて之と死傷はかり増加する。よって近づいたら手榴弾戦で應酬しようと思って居た時拂暁近く

敵が一一五高地西北端にとりついたので逆襲して之を駆逐した。此の時大隊長竹下少佐は負傷したが左方に独歩二八八大隊のあることを知った。

午前十一時頃旅団から大觀台附近へ集結の命令を受け薄暮頃から逐次撤退した。

之より先独歩二八三大隊は独歩二八九大隊（長山田少佐中ノ台にあり）と交代を命ぜられ十九日夜交代した。

3. 本戦斗間の損害

戦死　約五〇

行方不明　一

負傷　約七〇

四、独立歩兵第二八八及第二八九大隊の戦斗

八月十八日の戦況

師団は兜山附近にあった独歩二八八大隊を第一線に

注入する事を決意し午前四時頃之に命令を下達した。
右大隊は午前六時頃柏原発七時長崎上陸自動車で午前九時頃千歳台の七三旅団司令部へ到着して次の要旨命令を受領した。
「独歩二八三大隊の攻撃は有利に進展して敵を逐次北方に圧迫中である。二八八大隊は先つ天神山附近に前進して午後の戦闘を準備せよ」。
正午乃至午後一時頃の間に大隊は天神山に到着しそこで応急的な築城中更に「大觀台北側無名池附近に前進」と言う第二段の命令に接した。
午後四時頃敵に近接したので展開したが濃霧の為視界百米程で前進目標がなく識別出来なかった。
午後四時半頃道路上に出た右翼一線中隊長から「只今軍使が来りて戦闘中止の要求があった」との報告があったので旅団司令部に

其の真偽を確かめたところが本当であった。其の命令は午後五時頃第一線各中隊へ伝った。
かくして二八八大隊は一部が四嶺山南麓に主力は沓形台西方高地北端にあって夜を徹した。
左右の連絡は戦車第十一聯隊とは良好にとれたが竹下大隊とは夜間中には遂に不能であった。

2. 八月十九日の状況

十九日未明第一線に白旗を掲揚せよとの命令が午前十一時頃から刻々大觀台北側に後退し竹下大隊の左に連繋して位置せよとの命令を受けた。
刻から撤退を開始終夜新陣地に陣地構築をする。然るに竹下大隊は夜間山田大隊(独歩二八九)と交代を命ぜられたが二八九大隊の陣地の左翼は二八八大隊の右翼から三〇〇米も後退して居て其の間隙が極めて危険があったので此処へ

外務省

二八八大隊から一部隊を出して閉鎖した。

3. 八月二十日、二十一日の状況

敵は朝来省形台、青方へ進出し、我が第一線と近さは六〇米、遠さは三〇〇米の近距離で、昼夜に大小火砲を運動させて示威運動をしながら武装解除を要求して来るが、我は之に應じなかった。二十一日も同様の状態であった。

4. 八月二十二日の状況

第二線を撤し、後次第軍は三好野飛行場へ集結する。夜、三好野以南の蘇軍の指示する地区へ分宿する。

5. 八月二十三日の状況

武装解除の為、三好野飛行場に集合、高城遥拝後、武器を蘇軍所命の地点に直く。

6. 本戦中の損害

独歩二八八大隊	戦死 四	負傷 一二	外務省
独歩二八九大隊	〃	〃	
〃	〃	〃	

五

1. 第一砲兵隊

主力は千歳台附近にあって戦闘せず、第一中隊が独歩二八三大隊と行動を共にしたことは前の通り。

2. 第二砲兵隊

四嶺山にあった岡崎中尉の指揮する十五加中隊は、ロハトカ岬の敵長射程砲と応戦して之を沈黙させた。

3. 高射砲隊

部隊は次様な配置にあった。

(一) 聯隊本部 第一大隊本部(長小松中佐)

第二、第三、第四中隊

第四大隊本部（照空）第十四中隊（照空）

右　柏原地区

（二）第十四中隊（照空）の高射砲小隊（二門長今泉中尉）

右　村上　湾

（三）第三大隊本部（長村上少佐）第九、第十中隊及第十三中隊（照空）

右　幌延海峡北岸　占守地区

（四）第十一中隊

右　蔭涌

（五）第九中隊の一小隊

右　四嶺山附近

（註）第二大隊本部（長長谷川少佐）第一及第十二中隊は無線北海道へ転進

第七及第八中隊は北海道へ転進途中海没した。

部隊の主力は対空対地上共戦ひ終りたり。只村上湾の

今泉小隊が盤城附近へ来た敵の軽艦隊に対して海上射撃をなしたのと四嶺山の井上小隊が地上戦ひを行ったのみである。（前述参照）

員傷者三あるも戦死者はなし見込み。

4. 連射砲隊

第三中隊が占守地区で独歩第二八三大隊と共に戦ひたことは前述の通りである。其の他第二中隊の佐藤分隊は国端崎で戦ひた。

5. 工兵隊

泉少佐の中隊のみが八月十八日戦車第十一聯隊の戦ひに協力して同日午前八時頃から四嶺山を攻撃した。

泉少佐戦死　其の他は状況不明

北千島地区の武装解除

幌筵地区　八月二十二日　盤城附近

占守地区　八月二十三日　三好野附近

外務省

七、右の外昭二〇・八・一三、温祢古丹部隊が柏原へ転進の際、武装漁船九隻喪沈破の為、師団工兵一小隊、独四十九大隊の半中隊、高射砲第四中隊の十五名計約三〇〇名が海没した。

第三節　中及び南千島各兵団の武装解除

一、在松輪島　独立混成第四一聯隊

八月二十六日第九一師団の水津参謀同道蘇軍約三〇〇松輪島に進駐　在島部隊の武装を解除した。

二、在得撫　独立混成第二九旅団（附図第七参照）

八月二十九日朝蘇艦得撫島東端岩見浜に碇泊我が方旅団長仁保少将及第三大隊長同艦に到り協定成立。午後蘇軍上陸、我が方は兵器の一切を集積して待て居た為、武装解除は簡単に終了した。

三、在擇捉島　第八九師団主力（附図第八参照）

八月十七日方面軍参謀長の指示によって約一七〇〇名を以て八月十二日の日附を以て召集解除した。

右の中約三五〇名は十七日夜独航船によって根室へ送つたが他は島内の各部落へ分散させて地方人とした。

1700-350
=1350

2、八月二十八日師団司令部は天寧飛行場へ移転した。此の日正午頃蘇軍約一大隊は駆逐艦一輸送船一に留別港へ上陸した。蘇軍は上陸後直ちに同地にあつた我が歩兵一中隊及船舶工兵聯隊を武装解除された。

3、師団長は八月二十八日参謀長森田大佐以下六名を留別に派遣したが一切は翌二十九日未明蘇軍将校を同道留別を発し午前十一時頃海路天寧に着いた。師団長は直ちに蘇軍指揮官たる海軍少佐と会談、次いで午後四時乃至午後七時の間に天寧附近の全部隊の武装解除は終了し将校下士官兵別に既設兵舎に收容された。

4. 先に召集解除後各部落に入り込んだ少人と部隊と同様に收容された。

在色丹及び国後島混成第四旅団（附第八参照）

イ. 九月一日蘇軍約五〇〇色丹島に上陸、我が混成第四旅団長 工藤中佐 ヶ浦に対し翌九月二日蘇軍約三〇〇が上陸した。又国後島古釜布に対し武装解除に関しては明かでないが多分当日又は翌日には終了したものと思はれる。

第三章 武装解除後に於ける各兵団部隊の行動

第一節 樺太部隊の行動

第一款 上敷香附近集結部隊の内容と作業大隊の編成

一 八月下旬上敷香及豊原に集結せしめた部隊は恵須取及び内路附近以北にあつた全将兵約四〇〇名で之を九月十日乃至十二日の間に次の四作業大隊に編成した。

第一大隊 歩一二五の第三大隊及び歩兵砲大隊を基幹とたもの。大隊長 飯田中尉

第二大隊 歩一二五の第一、第二大隊を基幹とたもの。大隊長 北川大尉 後に田代中尉 交代

第三大隊 向地視察隊、歩三・六の第三大隊の一部 各配属部隊を基幹とたもの。大隊長 中沢大尉

第四大隊 古屯附近の負傷者約二〇〇名、第一乃至第三大隊

所属部隊の残留者、歩三〇六の第三大隊の主力及び歩二五の第十中隊を基幹とせるもの

大隊長は 蘇軍 将校

二、作業大隊の行動

1. 第一大隊（飯田大隊）

アレキサンドルフスクへ引き同地に大工及礦山労務の既経験者を残置して他はシベリアへ移送された。但し歩三五第三大隊の約五〇名は第一次還送で敦賀へ上陸した。

2. 第二大隊（田代大隊）

オイール附近へ行ったが第一次還送で全員函館へ上陸した。

3. 第三大隊（中澤大隊）

田代大隊と同様でデルビンスコエに移されたが只歩二五の下道中尉の指揮する混成の約一中隊（二五〇名）が主力と別れて一旦ウスリー原へ戻り第一回還送には残置された。

4. 第三大隊

最初沼岸の炭坑へ（ウスリー、其の中の半分は昭和二年十月四日一旦大泊へ移ったが最後には全大隊が再び北上して上敷香、敷香、多来加の順に移ったが第一回の還送では多来加にあった一中隊のみが北川大尉と共に函館に上陸した。

5. 作業大隊編成によって余剰となった将校は昭和二年九月十七日豊原へ移されて豊原へ着いた。

第二款 豊原方面集結部隊の状況

一、豊原方面集結部隊の内容と作業大隊の編成

豊原方面へ集結した部隊は上敷香方面に集結した外の所謂在樺部隊の主力で後に上敷香方面及千島

方面から一部が加はつて来る。
一部が加はつて来る。
九月四日頃から逐次一〇〇〇名単位の作業大隊が編成
された。

二、作業大隊等の行動

イ、シベリア方面への移送

(一) 大泊から出発したもの

昭二〇・九・二〇 二大隊(二〇〇〇名)及将校部隊 四七一名
〃 一〇・一三 四〃 (四〇〇〇名)及中千島の七〇〇名
〃 二〇・中旬 約六〇〇名(山砲八八の小林中尉を長とす)

(二) 真岡から出発したもの

昭二〇・十月一日頃から次の四大隊は明らかに未だ他にある見込み。

池田主計少佐を長とする一大隊
原口少佐(大谷の飛行場大隊長)を長とする一大隊
山崎大尉(工八八の中隊長)を長とする一大隊
大越大尉(向地駐屯隊長)を長とする一大隊

右計約四〇〇〇名

(三) 大佐以上の左の将校は昭二〇・九・二三 大澤飛行場発シベリア(向ふ(川先は八八四フスク附近とのこと))

八八師団長岸木中将 同参謀長鈴木大佐
同司令部附福富大佐
同司令官柳少将 豊原地区海軍部長
豊原聯隊区司令官 高澤
黒木海軍少将 豊原聯隊区司令部々員 高澤
大佐 歩二五長 山澤大佐 歩一二五長 小林
大佐 歩三〇六長 高澤大佐 山砲八八長 日野大佐
右の外南千島から移送された八九師団長小川中将
同参謀長 林田大佐 混成三旅団長志波少将
(注) 将官には副官及び当番各一名、大佐には当番各一名を附して居る。

外務省

2、未一面送還後、樺太へ残留したもの
確度なしものは、次の通り
(一) 五八八を主体とする一〇〇名（比豊原）
（注）上敷香陸軍病院長 菅田軍医大佐及八九師
軍医部長森乙軍医大佐も共に居る
(二) 上敷香、敷香の地区に残置せしめられた約七五〇名
(三) 中澤大隊から上敷香へ残された下道中隊の約
二五〇名
左の外は不明であるが、多くはシベリアへ輸送されたものと
思はれる。

三、樺太憲兵隊及豊原特務機関の行動

1、憲兵隊
(一) 豊原の本部
九月五日白浜中佐以下監禁
(二) 落合分隊
九月四日 准士官以上 豊原へ移動
(三) 大泊分隊
大泊にて監禁
2、裁判
憲兵隊、特務機関共監禁後、裁判に移り十月十八日
頃から審理終了したものは、逐次シベリア方面へ移された。
判決は懲役六、七年以上の重なるものである。

四、上敷香陸軍病院の行動
1、九月二日 蘇軍の監理に入る
2、シベリア方面へ移送されたもの
左のもの以外の全職員は、岩佐軍医中尉を長とする一中隊
を編成（編成外の将校は、別にする）十月二十日大泊出帆
残置されたもの
菅田陸軍病院長 庶務主任 工藤衛生大尉 治療主任
竹内軍医大尉 薬剤主任 中村薬剤少尉

経理主任鎌田主計少尉、其の他所部軍医中尉菊野軍医中尉、岡崎軍医少尉、外二七名並びに患者（全員）

3. 残留後の行動

(一) 十月初旬落合陸軍病院の患者十二名収容

(二) 十月十日南千島の千島第二陸軍病院の患者七五名収容

(三) 十月二日八八師衛生隊の患者約八〇名並びに同衛生隊及び八八師各隊の衛生下士官兵約三〇名を収容

(四) 十月八日近各方面労務の為の患者を収療

(五) 十月二二日乃至二八日の間に約二五〇名の患者を各地方病院に分散して陸軍病院の活動停止。

右の患者は一名の外全部退院して居る由である。

(六) 昭二一九一大泊着 雄武泊に移されたが一般部隊と同一作業に服して居た。

第二節 千島各部隊の行動

第一款 北千島部隊の状況

八月下旬から逐次作業大隊を編成、九月中旬以降昭和二一年一七月頃までの間に左のものを除いて大部分は、シベリア方面へ移送された。

但し徒歩二八八の八〇名及び戦車一一の若干は、空路カムチャツカへ移された。

徒歩 二八八大の約一二〇名

千島第一陸軍病院の職員及び患者約二〇〇名

技術者を以て編成した技術大隊約三〇〇名

又将校は師団長堤中将、参謀長柳岡大佐以下全員昭二〇・一二・一 柏原丸帆にシベリアへ向った。

第二款　中千島部隊の状況

一　松輪島の状況

九月一日作業大隊三箇を編成したが、その後の状況不明

二　得撫島の状況

九月上旬から、逐次見島湾中心の地区へ集結、中旬作業大隊を編した。大隊長は従来通り、中隊長以下には変動があつた。編成過剰の将校七八名は別に部隊を編成して草野大尉之が長となる。

十月二日　將校部隊、飛行場大隊、船舶部隊作業隊及患者の一部約二〇〇名見島湾に乗船、同四日本帆、十月七日大泊港着。將校部隊同当番患者及作業隊計五六百名の外上陸、他のものは引動は不明であるが多分シベリア方面へ移送されたものと思はれる。

大泊に上陸したもの大部分は本後雄吹泊に作業し、二年十月二一日頃真岡へ移され第一送置で函館上陸したものである。

第三款　南千島部隊の状況

一　擇捉島の状況

(一)九月十日頃から作業大隊十箇を編成

(二)作業大隊の移動

(イ)九月十日乃至二十日の間に移し一箇大隊は天寧発他へ移動した。行先は不明であるが、シベリア方面と思はれる。

(ロ)師団長山内中將、森田参謀長及混成第三旅団長志波少將は九月二十日頃天寧発、同二十六日豊原南方大泊飛行場からシベリア方面へ移されたことは前述の通りである。

(ハ)九月二十九日師団司令部將校等約一〇〇名は天寧発、十月四日得撫島部隊と同船大泊着

外務省

中、師団司令部附、染谷少佐、梶山技術少佐、田辺獣医大尉等十数名のみは第一次送還で、函館（上陸したが、他はシベリアへ移された様である。

（ホ）他は、残置された部隊の中、徒歩二九四大（長森田少佐）を主体とした約一〇〇〇名は昭二一・六・二三年頃発、六月二七日大泊上陸、陸路北サカレンのテルピンスコエ南方六五粁の地点で、諸作業後十月頃には上敷香附近に移された様である。

三、昭二年末、擇捉島残留部隊

天寧附近に集成の一作業大隊（千島第三陸軍病院長、跡部大佐以下約三〇名）

二、其の他の諸島の状況は不明である。大部分はシベリア方面へ移されたものと思はれる。

A·1·0·0·1-2 第六巻

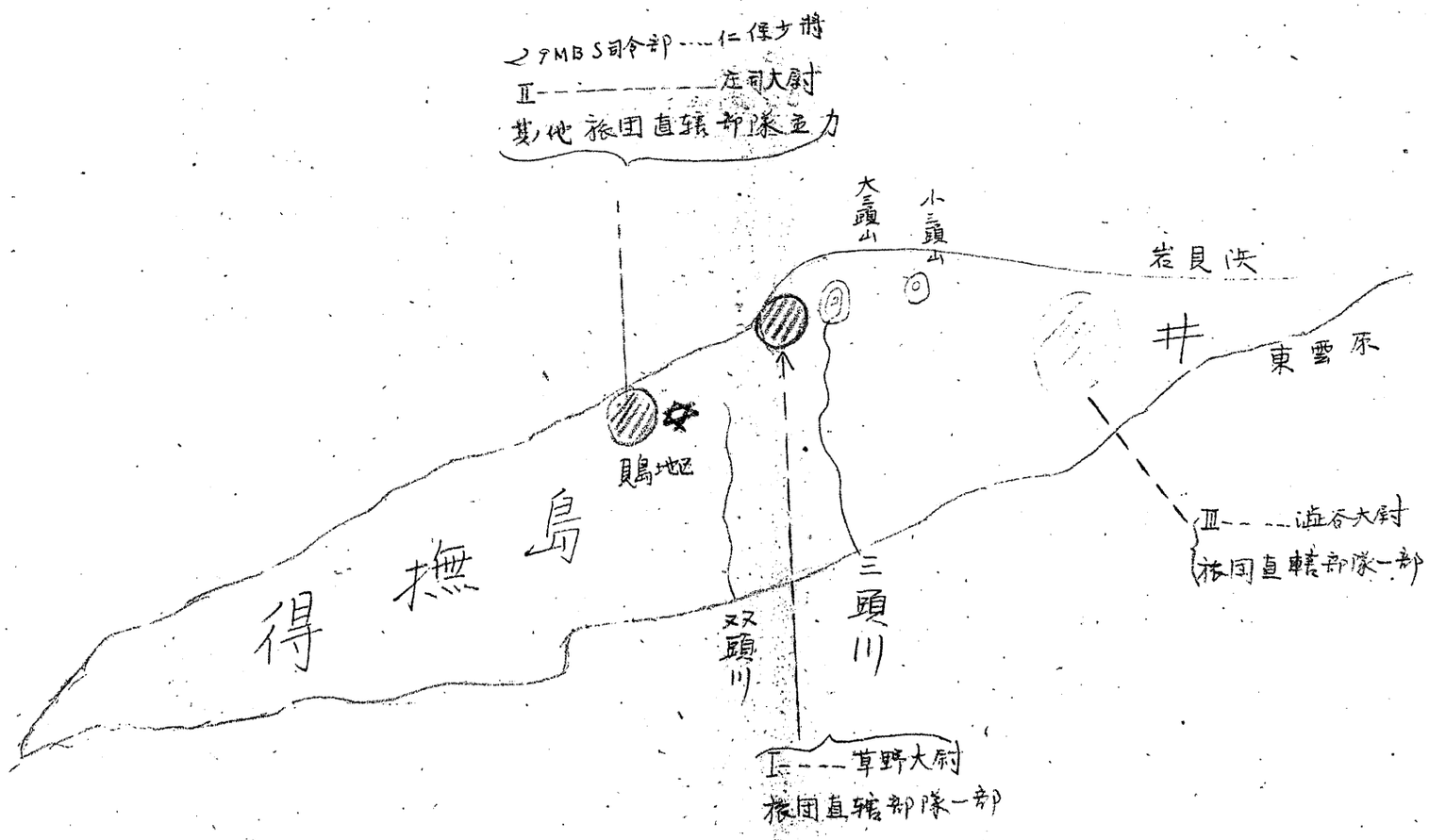
附図第六

八月十八日於ける
占守島戦闘概見図

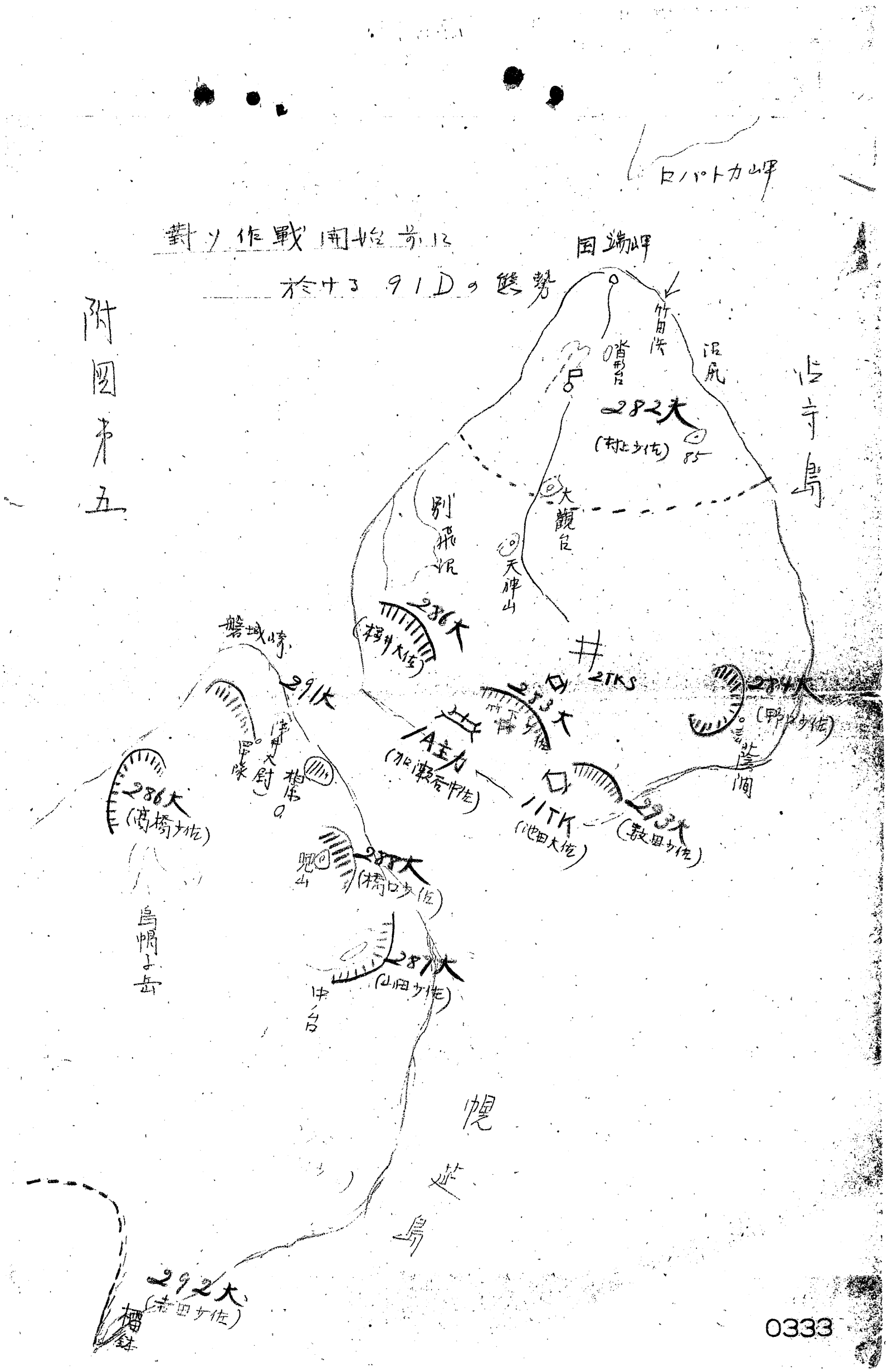
A'.1.0.0.1-2 第六巻

附図第七

終戦時に於ける第M13sの態勢

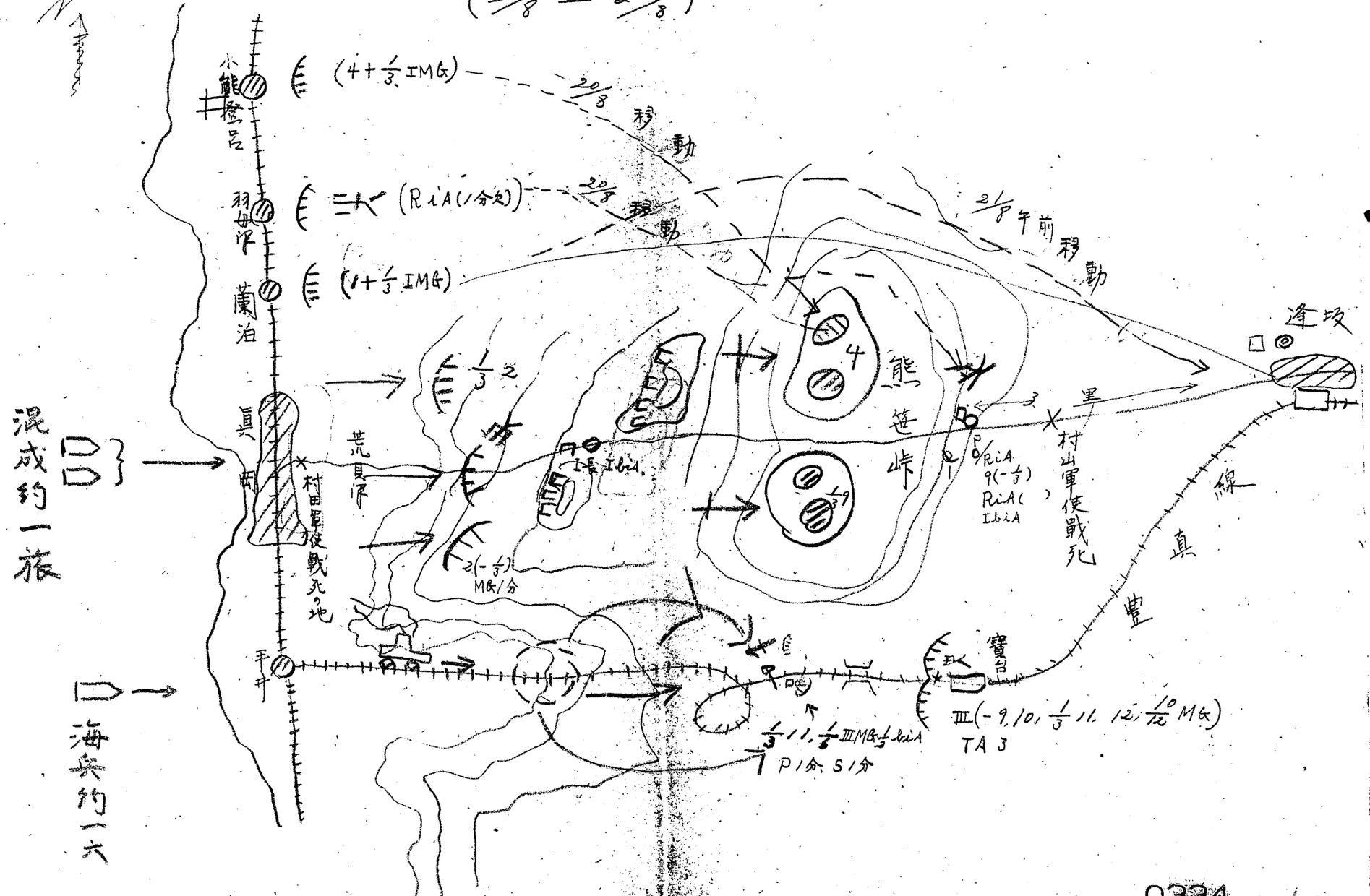


A·1·0·0·1-2 第六巻

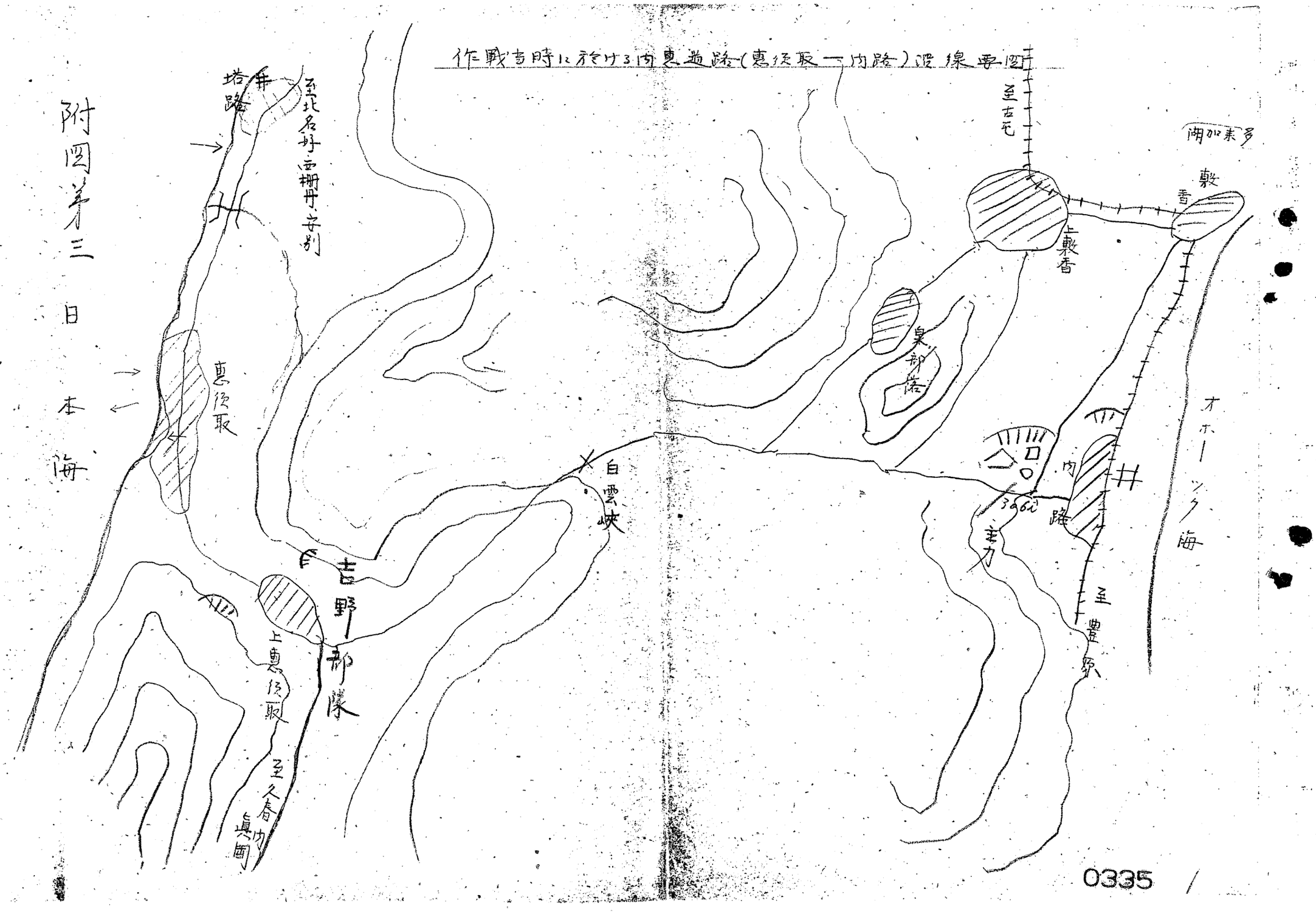

ロバトカ岬
對ソ作戦開始前ニ於ケル 91Dの態勢
国端岬
附図第五
竹田浜
沼尻
282大
(村上少佐)
85
別飛沢
大観台
天神山
236大
(樋口大佐)
磐城峰
291大
(伊藤大尉)
253大
(下井少佐)
274大
(野口少佐)
陰間
1A主力
(北澤看中佐)
1TK
(池田大佐)
293大
(鈴田少佐)
286大
(高橋少佐)
287大
(橋口少佐)
287大
(山田少佐)
中台
292大
(吉田少佐)
柵鉢
佐寺島
幌延島

眞岡附近戰斗に関する要図
(20/8 — 22/8)

附図第四



附図第三

日本海

作戦当時に於ける内東道路（恵須取―内路）設線要図